


アイリスの剣外伝



登場人物  
紹介

◀ フォーサイズ

ブルーデンスの夫。  
ダグリード侯爵家の当主にして、  
アイリス国軍の元帥を務める。

▲ リン

フォルセリーヌの婚約者。  
何の身分も持たない普通の  
アイリス人だが、実は……？

▲ フォルセリーヌ

翔国オルガイムの王女。  
ブルーデンスの憧れの人で  
あるサスキアの一人娘。

エルロージュ▲

フォーサイズの母。  
穏やかな物腰の  
貴婦人。

▲ ファティマ

フォーサイズの妹。  
兄の部下である  
チェイスに恋している。

▲ シェブロー

ブルーデンスの叔父。  
アイリスの宮廷医にして  
一級魔術師。以前は  
ヒラルダと名乗っていた。

ブルーデンス▲

ダグリード侯爵夫人。  
かつては男装し、アイリス騎士団・  
雷龍隊の副隊長を務めていた。

## 目次

### プロローグ

第一章 突然の来訪者

第二章 正統なる後継者

第三章 憂鬱ゆううつな昼下がり

第四章 波乱の円舞曲ワルツと少年期の終わり

エピローグ

6

14

69

135

187

273

## プロローグ

「サスキアっ……！」

翔国オルガイム王妃執務室の扉が勢いよく開かれ、血相を変えた男が飛び込んでくる。王妃の名を呼ぶその声は上擦っついて、随分と余裕がない。ただ、扉が荒々しく閉められた音に続いて鍵をかける音がしたので、理性を完全に失っているわけではないらしい。

扉の前にいる衛兵はさぞや肝を冷やしただろうな、とサスキアは他人事のように思う。奥の執務机へ足早に歩み寄ってくる彼は、アルフクレイダイン・ロシユフォースト三世。翔国オルガイム国王であり、二十年連れ添った彼女の夫だ。

「おかえり、アルフレイン。だが、ちょっと待て。もう少しで終わるから」

そう言いながらも、サスキアは顔を上げずに羽根筆を走らせ続ける。彼女が今、手元の書類に書き込んでいるのは、もう宗教関係の正式文書にしか使われなくなった神代の文字だ。一筆書きする決まりとなっており、途中で手を止めてしまえば、また最初から書き直すはめになる。

机の上にはそれ以外にも、今日が締め切りの書類が山積みになっていた。今の今まで不在だった

アルフクレイダインに代わって、サスキアが膨大な政務をこなしていたのだ。

「さあ、できた。ここに署名してくれ」

ようやく手を止めて顔を上げたサスキアは、夫が読み易いように書類を反転させる。みずからの笑顔の威力を自覚する彼女は、それは美しく微笑んで羽根筆を差し出したのだが……

「何を呑気（のんき）にっ、そんなことをしている場合か！ 一体どういうことか、説明しろ！」

怒り狂う今の彼には、その威力がいつもの半分も通用しなかった。アルフクレイダインは髪を振り乱し、執務机に荒々しく両手を叩きつける。弾みで隅に重ねていた書類が、何枚か床に滑り落ちた。サスキアはため息を吐き、持っていた羽根筆を置く。

長期の国外視察から帰った夫が、真っ先に彼女の執務室を訪れるのはいつものことだ。ただ、それは留守中の報告を聞き、国王代理を務めた彼女に労いの言葉をかけるため……それが今回は、こうして怒りをぶつけてくる。

その理由はアルフクレイダインが溺愛する一人娘、フォルセリーヌ王女の駆け落ち騒動にある。しかし、母親であるサスキアは落ち着いていた。なぜなら彼が不在の間に、王女とその相手をたきつけ、まんまと駆け落ちさせたのは、他でもない彼女だったからだ。

王女の相手は、アルフクレイダインとサスキアの共通の友人である、リインという青年だった。

「説明も何も、手紙で知らせた通りだが？ 事後報告になってしまったことは申し訳なく思うが、絶好の機会が巡ってきたんだ。立場が逆だったら、あなたは私が帰ってくるのを待っていたか？」

謝罪はしても、一切悪びれた様子のない彼女は、即位して二十年、今なお衰えない美貌でふた

び微笑んだ。

「そうだ、フル親子は地下牢にいる。余罪を追及したら国外に追放するつもりだから、今のうちに一、二発殴ってきたらどうだ……ただし、あくまで死なない程度にな」

「そんなこと、どうでもつ……よくはないが、殴るのは後だ！ 大体、婚約は偽装だと手紙に書いてたじゃないか！ なぜ帰ってきたら、駆け落ちにまで発展してるっ！」

何とも王妃らしからぬ恐ろしい台詞を口にしたサスキアの鼻先に、アルフレイドインは一通の手紙を突きつける。それはサスキアが一週間前、早馬に託した彼への手紙だった。確かにそこには彼女の字で王女の婚約は偽装であると書かれていた。

今回の偽装婚約は、十四年前に起きた王女誘拐事件の首謀者を捕縛するため、当事者二人の了解を得て、サスキアが仕組んだものだった。

アルフレイドインが即位したばかりの頃、彼とサスキアは、戦争で壊滅的な被害を受けたオルガイムの立て直しに追われていた。そんな中、彼らの一人娘であるフォルセリーヌが誘拐されたのだ。その事件の際、フォルセリーヌは背中への翼を失った。

愛娘の凄惨な姿を目の当たりにし、冷静な判断が下せなかった当時のサスキアは、実行犯をその場で斬り捨ててしまった。だが彼女が手に掛けたのは、金で雇われた荒くれ者の傭兵達で、首謀者は逸早く逃げ去っていたのだ。

その後の捜査で黒幕が判明したが、それは国王に次ぐ権力を有する、オルガイム審議院の議長バルザ・フル……とても状況証拠だけで捕縛できるような相手ではなかった。そして狡猾なバルザ

はこの十四年間、決して尻尾を見せなかった。

そればかりかフォルセリーヌが年頃になると、彼の息子ヘスターとの縁組を持ちかけてきた。ヘスターの方も王女誘拐事件の首謀者が自分の父親であることを知りながら、王位継承権を得るためフォルセリーヌに求婚してきたのだ。

性根の腐り切ったフル親子に対して、サスキアは腸が煮え繰り返る思いでいた。だが王族誘拐事件の時効が残り一年と迫っていた今、長らく会っていなかったラインと運命的な再会を果たしたのだ。

サスキアは彼に事情を話し、一芝居打ってもらうことにした。彼とフォルセリーヌを偽装婚約させ、バルザ達が動くのを待ったのだ。

そして父親ほど知恵の回らないヘスターは、まんまと罠にかかった。ならず者を雇って二人を襲撃した彼は捕縛され、厳しい取り調べに耐えかねて十四年前の事件の主犯が父親バルザであると証言したのだ。

ようやく積年の恨みを晴らしたサスキアは、協力者であるラインに望むままの報酬をやると言った。そして彼は、王女フォルセリーヌを望んだ。それも含めて、すべてサスキアの計画通りだったのだが……

「本物になるよう仕向けてはいたが、手紙を書いたときにはまだ偽装だったんだよ……まあ、こんなにも早くそうなるとは予想外だったかな」

「どうしてそんな馬鹿な真似をつ……」

アルフレイドインは、ひどく驚いた様子で声を詰まらせた。

「娘の初恋を応援して何が悪い？ 幼い頃からリインの肖像画に恋していたフォルの想いは、生身の彼に会ってその人となりを知った後も、揺るがなかった。そんなあの子の想いに、彼も応えた。それだけだ。彼が旧友の娘を弄ぶような馬鹿じゃないのは、あんたも承知だろう。私達はいずれ、あの子より先に死ぬんだ。あの子を安心して任せられる相手が現れたことを喜び、二人の幸せを祈ってやるべきだ」

まるで濡れ光る漆黒の刃のごとく、伶俐で整ったリインの面差し。それを思い出し、サスキアは懐かしむような笑みを口の端に刻む。

「そんなことできるかっ！ あいつだぞっ？ あの死神は、俺らより年上なんだ、フォルくらいの歳の孫がいたっておかしくない！」

アルフレイドインは、盛大に頭を振って吐き捨てた。今、彼が思い出しているのは、かつて自分と死闘を繰り広げた死神の姿なのだろう。

二十年前の戦乱において、圧倒的な力と、数々の非情な殺戮行為で地上を震撼させた生ける死神は、その名をディゾ・リーリングと言った。死神といっても、正体は人間だ。白き死神イシュトレイグと契約を交わした折に、その名を貸し与えられたのだ。最古の創造神と戦神に育てられた救世主サスキアとは対極の存在として、半ば伝説化している。

彼は最初、救世主サスキアと敵対していた。だが、彼女に敗れたことで、白き死神と交わした契約が破綻し、死体すら残さずに消滅した……そう世間に広く知られている。

だが、実は冥界神の恩恵を受けて蘇り、リイン・フォルラーツという名でひっそりと暮らしていたのだ。

「再会したディゾ……いやリインは、最後に見たときと何一つ変わっちゃいなかったよ。それも神の恩恵ってヤツらしい……前の戦争で彼が受けた苦しみを思えば、それでも割に合わんくらいだな。そして平和になった今も過去に囚われていた彼を、死神から人間に戻したのはフォルだ。そんな二人を引き離すなんて、下衆の極みだぞ。フォルに嫌われてもいいのか？」

アルフレイドインは手紙をクシャクシャに握り締め、その場にへたり込んでしまう。サスキアが発した最後の言葉が、ぐうの音も出ないほど応えたいらしい。さきほどまでの剣幕はどこへ行ってしまったのか、丸まった背中がひどく小さく見えた。

「しかし、結婚なんて早過ぎるっ！ まだ十八だぞ……」

「その辺は種族と文化によって違うからな。アイリスでは、それでもかなり遅いらしいぞ……何も二度と会えないわけじゃないんだから、あまり嘆くな。アイリスなら、そう遠くもないしな。どこかの馬の骨とも知れない人間より、よっぽどマシだろう。腕は立つし、ツラも良い。孫の可愛さは約束されたようなものだ」

サスキアは夫の傍に歩み寄り、慰めながら肩を叩いてやる。思いの外早かった娘の巣立ちを寂しく思っているのは、彼女も一緒だった。

「……っ、あんな奴の肖像画なんて、飾っとくんじゃなかった！」

「確かにきつかけはあの絵だろうが、あれがなくても二人は結ばれたと思うぞ……私達みたくにな。」

こんな未来が来るなんて、この世界——エリアスルートに来たばかりの頃は想像もつかなかった。あの頃は元の世界に帰りたくて仕方なかったが、今はこの世界でアルフレインの隣にいること以外の幸せは考えられない。だから、あの子達も大丈夫だ。きつと私達以上に幸せになれるさ」

「サスキア……」

サスキアが笑みを浮かべて自信たっぷりに言うと、アルフレイダインはようやく顔を上げた。情けない姿が目立つが、あけっぴろげで愛情深い彼は、出逢ったときから一途にサスキアを想い、ずっと守ってくれた。救世主としての重圧に押し潰されそうだった彼女の心を慰め、誰かを愛する気持ちも教えてくれた。アルフレイダインなくして、今のサスキアはない。

「リインは王位を継ぐつもりはないと言っていたから、頑張ってもう一人作るうな。今度は絶対に、あんた似の息子を産むぞ。継嗣問題も片付くし、娘と違って手加減せずに扱ける」

「ももももも、もう一人っってお前！ そんな簡単につ……」

突然の爆弾発言をした彼女に対し、変なところで繊細な夫は動揺して口籠る。サスキアの目論見通り、論点はすっかりすり替わった。

「私達だってまだ若いんだ、何とかなるだろう？ あの子達に負けず、新婚時代に戻ったつもりで楽しもうじゃないか」

「……くそっ……ああーあ、まったく。お前には負けるぜ、サエ」

妻の輝くばかりの微笑みを前に、アルフレイダインは降参だと言うように破顔した。そして、かつてと同じ呼び名を口にしたが……

「……ああ、そうだ。来期から聖獣使い育成の助成金を増額することが決まったが、軍事費をはじめ、どの予算もギリギリでこれ以上切り詰めるのは無理だ。だから国外視察費と称したあんたの骨休めのための金、来期からこっそり削らせてもらうからな」

次いで突きつけられた台詞に彼は、この世の終わりのように蒼褪め、盛大にむせ返った。

日差しが優しい午後のこと、ダグリード侯爵夫妻は避暑地へザースにいた。

二年前、現場任務から退いた元帥閣下は、長期休暇中……最愛の妻とともに、へザースの別邸裏の迷路庭にある東屋で優雅にまどろんでいた。

人払いをした二人は、テーブルと椅子を脇にどけ、芝の上じかに座り込んでいる。背中を預けているのは、空一面に枝を広げるキルギス・アゾレの木の幹だった。ツゲの木の生け垣が周囲を丸く囲み、たくさんの白い花を咲かせたキルギス・アゾレの枝が屋根代わりとなっている。いわば、天然の東屋だ。静かに舞い落ちる花弁は雪のようで、幻想的な美しさがあった。

「……フォーサイス、様……」

フォーサイスが名を呼ばれて傍らを見やると、そこにあつたはずの妻の笑顔がない。それを訝しく思う前に、膝の上に柔らかな重みを感じる。妻の小さな銀色の頭が、そこにあつた。

日差しが暖かくてつい寝入ってしまったらしい妻ブルーデンスを見て、フォーサイスは優しく微

笑む。かつて、同じように白い花弁が降る中で眠る彼女に手を伸ばしたときのこと、まるで昨日のこのように思い出された。

彼に寄りかかる妻の肢体は相変わらず羽根のごとく軽かったが、当時に比べて柔らかく、丸みを帯びている。男を装う必要がなくなった彼女の身体は、本来の女らしさをすっかり取り戻していた。これ以上ない幸福感を覚えながら、フォーサイスはブルーデンスの腰まで伸びた銀髪を優しく指で梳き、花弁を払ってやる。地面に落ちた花弁が純白のままであつたので、彼はふたたび柔らかかな微笑みを浮かべた。人の嘘に反応して、花弁を黒く濁らせるキルギス・アゾレ……この特異な植物の花弁は、もう二度と二人の間で色を変えることはないだろう。

すべての嘘が取り払われた今、彼女は侍女でも副官でもなく、かけがえない己の伴侶なのだ。幸せな夢を見ているのか、穏やかに弧を描く唇に口づけようと、フォーサイスは身を屈める……だが次の瞬間、彼は苦虫を噛み潰したような表情で顔を上げた。

「無粋な……」

芝を踏み締め、まっすぐに向かってくる足音が耳朶を打つ。その足音は、東屋の前でぴたりと止まった。

「ご休息中、申し訳ございません。当主様、奥方様」

足音の主はフォーサイスの予想通り、老執事イーノックだった。彼は寄り添う二人を前にしても、一切動揺を見せず、深々と頭を下げる。

へザース邸だけでなく周辺一帯の莊園をも管理する彼は、大概の問題なら主であるフォーサイス



の指示を仰ぐまでもなく、一人で片付けてしまう。実に有能なイーノックに、フォーサイスは全幅の信頼を寄せている。そんな彼が、人払いをしたにもかかわらず自分達のもとにやって来たからには、よほど重大な問題が発生したに違いない。フォーサイスはそう考えた。

「ブルーデンスが眠っている。声を抑える……一体、何があった」  
みずから寄りかかって眠るブルーデンスを起こさぬように、フォーサイスは彼女の目と耳を手でやりわり塞いでから問う。頭を上げたイーノックのモノクル越しの瞳からは、ただならぬ緊張感が窺えた。

彼の手には、黒く細長い金属の筒が握られている。どうやら書簡筒らしいが、差出人の家名を表す封蝋がイーノック側に向いているため、フォーサイスからは見えない。だが、イーノックの白い手袋の隙間から覗く濃い紫の組み紐を見て、彼は嫌な予感を覚えた。

「さきほどダグリード本邸より、この書簡が早馬にて届けられました。……封蝋は、オルガイム王家のものです。そしてご存知の通り漆黒の書簡筒は、オルガイムでは緊急の用向きでしか用いられません。それゆえ、無礼を承知で参りました」

老執事が声を潜めて告げると、フォーサイスの機嫌はさらに悪くなる。彼の脳裏には、見目麗しいオルガイム王妃の人を食ったような笑顔が浮かんでいた。

「この紫紺色の組み紐で、翼を模した飾り結びがしてあったそうなのですが、移送途中に解けてしまったらしいのです。送り主様は……」

「言わなくてもわかる……サスキア以外にないだろう」

イーノックの声を遮り、フォーサイスは吐き捨てるように言った。

翔国オルガイム王妃サエ・サスキア・ロシュフォーストは、フォーサイスとは縁戚関係にある。それはオルガイムの公爵家出身の母を持つブルーデンスも同じで、自分達夫婦にとつて切っても切れない縁がある人物だ。また二年前、ブルーデンスの実弟バーネスが内乱を起こした折には大層世話になった。いずれ、借りは返さねばならないと思っている。

けれど、長年抱えていた彼女への苦手意識は今も健在だ。その名を聞いただけで脊髄反射のように、眉間に深いしわを刻んでしまう。

「……サスキア様？」

フォーサイスが最小限に抑えた声で呟いた名に、眠っていたはずのブルーデンスが反応する。彼女は頭に置かれていたフォーサイスの手を撥ねのけ、飛び起きた。ただ、夢と現実の区別がまだついていないらしく、目を瞬かせながら周囲をキョロキョロと見回している。

寝言でフォーサイスの名を呼んでいた彼女は、今しがたまで夢の中でも彼と過ごしていたはずだ……それなのに、生身のフォーサイスを無視して、ここにはいないサスキアの姿を探している。サスキアとの圧倒的な差を見せつけられて、フォーサイスがついさきほどまで浸っていた幸福感は、一瞬で霧散してしまった。

「奥方様……お休みになっているところをお邪魔してしまい、申し訳ございませんでした」

「……イーノック？」

老執事の声で、ブルーデンスはようやく彼の存在と、自分の現状に気付いたようだ。彼女は色素

の薄い頬を見る間に染め、耳まで赤くした。ドレスが汚れることも気にせず地べたに座り込んでいたことや、そのままうたた寝をしてしまったことを家人に知られ、恥ずかしく思っているようだ。やがてペティコートについた芝と花卉を払いながら、彼女は立ち上がるとうとする。

「失礼致しましたっ、私ったら寝惚けて……えっ……？」

フォーサイスが、そんな彼女の腕を咄嗟に掴んで引き止めた。驚いて彼を見下ろすブルーデンスの双眸は、寝起きのため若干潤んでおり、目元は羞恥で赤らんでいる。二人きりならば、屋外だろうと関係なく組み敷いているのにと、フォーサイスは思う。だが生憎、今は目の前にイーノックがいる。

使用人の中でもつとも古参の彼は、フォーサイスの亡父アスターと主従を越えた深い絆を持つ。そんな彼の前で、醜態は晒せない……フォーサイスの胸に湧いた劣情を見透かすように、イーノックのモノクルの奥の眼差しが、やおら鋭くなった気がした。

「イーノック、それは手紙ですか？」

フォーサイスが直前の行動をどう取り繕うべきかと悩んでいる間に、ブルーデンスはイーノックが手にする書簡筒に気付いたようだ。

「さきほど、サスキア様の名を聞いた気がします……もしかして」

彼女はハツとした表情で呟いた。

「はい、奥方様。オルガイム王妃サスキア様から、当主様宛ての親書にございます」

イーノックは呆気なく手紙の主を明かした。妻の銀色の瞳が見る間に輝きを増すのを見て、

フォーサイスは眉間に微細なしわを寄せる。もはや愛しい妻の心には、彼女が女神のごとく崇拜するオルガイム王妃しかいないようだ。

「フォーサイス様、早くお読みになってください！ 黒塗りの書簡筒に紫紺の組み紐ということは、相当の緊急事態のはずです！」

ブルーデンスが羞恥のために赤くしていた頬を、今度は興奮で上気させて訴えてくるのが、フォーサイスは甚だ面白くない。

「どうぞ、フォーサイス様」

書簡筒を差し出すイーノックの恭しい所作が嫌味に感じられるのは、被害妄想だろうか……そう彼は自問する。

「……わかった」

フォーサイスは諦めて首肯し、握ったままだったブルーデンスの腕を手放す。そしてため息を押し殺して立ち上がると、イーノックから手紙を受け取り、少々乱雑に封蝋を切った。

『親愛なるフォーサイス・ダグリード侯爵へ  
貴殿の幸福を願いつつ、ご挨拶申し上げます。どうか当月の守護神アルミナが、貴殿に祝福と心の平安を授けてくださるよう。』

まずは貴殿に、我が娘である王女フォルセリーヌ・ロシュフォーストが此度、貴殿の遠縁にあたる青年、リイン・ダグリード殿と極秘婚約に至ったことを申し伝える。このような国家規模の大事

を、事後にお伝えすることの無礼を心よりお詫びする。事がここまで早く進むとは私も予想しておらず、この手紙を早馬でお送りするのが精一杯だったのだ。どうか許していただきたい。

此度の婚約は、決して政治的なものではない。貴殿ら夫妻と同様に、フォルセリーヌとリインは出会ったと同時に惹かれ合い、真実の愛と信頼で結ばれている。ゆえに貴殿と奥方ブルーデンス殿には、あの子達の良き理解者、相談者となっていたいただきたいのだ。

今朝、二人は極秘にオルガイムを発った。七の日には、アイリスに到着するだろう。まずはリインの身辺処理と、母君の墓参りをするために、二人は国境都市イラクサのトカーズ村にしばし滞在することのこと。そして大きな集落でもないのので、フォルラーツの花屋と言えば、村人ならすぐにかかるといえる。

王女の初めての訪問がこのように非公式で慌ただしいものとなってしまったことも、大変申し訳なく思っている。ひとえに王女の安全確保のための緊急処置だと、ご理解いただきたい。

王女誘拐事件の首魁が捕縛され、また王女が此度の婚約により王位継承権を放棄したため、オルガイム王家は今、混乱を来している。ゆえにあまり詳細に書くことはできないが、彼ほどフォルセリーヌの伴侶に相応しい人物はいない。

十四年前の王女誘拐事件の首謀者を暴き、彼らが差し向けた刺客から王女を守ったのは彼だ。さらに二十六歳の青年ながら、前の戦乱において私が剣で後れをとった唯一の人間でもある。貴殿なら、その意味がわかるだろう。

両国のためにも、彼に相応の身分をご用意くださるよう依頼する。リカルド王への親書は、これ

から認める。

それでは貴殿の身の上に、永久にわたる雷龍の加護を。ミセツティア暦二十年、アルミナの月、二十四の日、グラミスの刻に認める。

ちなみに、この手紙には読み終えたと同時に、自動で消滅する仕掛けを施してある……心せよ。

翔国オルガイム王妃 サエ・サスキア・ロシュフォースト』

「……仕掛け？ 心せよ？ どういう意味……何だっ？」

何やら不穏な最後の一文についてよく考える間もなく、突如手紙から羽が生える。フォーサイスが咄嗟に手を放すと、手紙は羽ばたき始めた。そして見る間に上昇し、キルギス・アゾレの屋根にぶつかって、色鮮やかな火花を散らす……バラバラになった手紙の破片が炎をまとって宙を漂っていたが、程なく燃え尽き、完全に消失した。

「フォーサイス様……サスキア様からの手紙には、何と書かれていたのですか？」

宙を仰いだまま、呆けたように立ち竦むフォーサイスに、ブルーデンスが尋ねた。驚いて目を見張っているイーノックと違い、彼女が比較的落ち着いて見えるのは、オルガイム流の手紙を熟知しているからだろうか。もしくは、不思議な現象よりも、サスキアへの関心が勝るのか？ フォーサイスには、そのどちらであるのか判断がつかなかった。

ふたたびサスキアへの対抗心が湧き上がってくるが、今は、くだらない嫉妬をしている暇がない。

「七の日は、明日じゃないか！ 手紙の内容について話している時間はない。イーノック、表にハリュートを回してくれ！ ブルーデンス、お前も着替える。すぐにトカーズ村に発つぞ！」

フォーサイスは、イーノックに早口で命じた。

ブルーデンスには、道中で説明することにして……フォーサイスはみずからも旅装束に着替えるため、足早にキルギス・アゾレの東屋を後にした。

2

ブルーデンスは昨年の誕生祝いに夫から贈られた白馬、ソラースを駆っていた。

このところ晴天が続いているために、愛馬が乾いた地を蹴る音が高く響く。その強脚ぶりを全身で感じるの嬉しいことだが、彼女の表情は優れなかった。

それは今、夫婦揃って騎士団員の扮装をして、舗装されていない林道を進んでいることに関係している。ブルーデンスは外套のフードを目深に被った下に黒髪のカツラをつけ、久々に男装をしていた。

この道を選んだのは、国境都市イラクサへの最短経路だからだ。イラクサのトカーズ村へ明日ま

でに到着するには、馬車を使っている余裕などない。

さらにサスキアの書簡は本邸宛てだったので、ヘザースの別邸に転送されるまで無駄な時間を費やしてしまった。だが、休暇先がヘザースだったのがせめてもの救いだ。王都にある本邸からでは駿足で知られるキャバルス種の馬を休みなく走らせても、七の日には到底間に合わなかっただろうからだ。

フォーサイスが元帥に就任して以来、二人きりで遠出するのは初めてのことで……オルガウム王妃からの極秘依頼という大義名分を前に、護衛も連れずに行こうとする彼を止められなかった老執事は、見送る際、洪面を隠し切れていなかった。

「……オルガウム女王フォルセリーヌ様が、王位継承権を放棄っ？」

並走するフォーサイスからさきほどの手紙の内容を聞かされ、ブルーデンスはひどく驚いた。辛うじて音量は抑えたものの、つい口に出してしまう。辺りに人影がないか、彼女は慌てて確認した。口に出してみてもなお、実感が湧かないほど荒唐無稽な話だ……オルガウム女王フォルセリーヌが王位継承権を放棄し、アイリス人の青年と駆け落ち同然に出国した。そして今まさに、このアイリスに向かっているらしい。

サスキアが一人娘を呆気なく手放し、異国の地に旅立たせたことに驚きを禁じ得ない。豪放磊落な彼女だが、愛情深い母親でもあることは広く知られた事実なのだ。

「そうだ」

彼女と同じようにフードを目深に被ったフォーサイスが、そう短く答える。その口調は落ち着い

ていたものの、手綱を強く握る手からは焦りが窺えた。

「それでその婚約者の方を、ダグリード侯爵家の人間にしてほしいと……何と言えばいいのか、とても強引な解決方法だと感じます。本当に妃殿下が、そんなことをおっしゃったのですか？」

夫が嘘を言わないことを知りつつも、ブルーデンスはつい確認してしまう。

フォルセリーヌ自身が結婚相手として望み、サスキアも迷わず娘を託した青年は、王女誘拐事件及び殺人未遂事件を解決した、大変有能な人物らしい。

だが手紙にはフォーサイスの遠縁に当たると書かれていたものの、ブルーデンスどころか、当のフォーサイスさえ、その青年と面識はない。なぜなら、それはサスキアの嘘だからであり、彼女はその嘘を真実にしてほしいと暗に依頼してきたのだ。

つまりダグリード家とは縁もゆかりもない人物を、由緒ある軍人家系であるダグリードの族譜に書き加えると言うのである。サスキアには誰よりも恩義を感じているブルーデンスにさえ、その申し出は随分と横暴であるように思えた。しかも、その人物というのが……

「間違いない……白き死神、デイズ・リーリング殿だ」

ブルーデンスが口に出すことを躊躇った彼の人物の名を、フォーサイスははっきりと舌に乗せた。「……生きておられるという噂は、本当だったのですね」

ブルーデンスはフードの下で形の良い眉を顰め、複雑な気持ちで呟いた。

前の戦争で無残に命を散らされた人々は、冥界神の恩恵を受けて蘇った。その陰で、デイズ・リーリングも密かに蘇ったのだ……そんな噂が、まことしやかに囁かれていた。だが、その噂を信

じ、死神の力を利用してしようと考えた人間達が血眼になって探したものの、ついぞ見つからなかったと聞く。

けれど、前の戦争の英雄であるサスキアが生きていると言うのだから、噂は真実だったのだろう。今まで彼女は噂の真偽について明言することを避けていたが、デイズの名誉を回復するため、公の場で事あるごとにその人物像を語っていた。

デイズ・リーリングは、血と災いを好む悪辣な人物などではない。白き死神と契約したのも、殺された同胞達の復讐をするため……晩年にはみずからの行いを悔い、白き死神との契約を解消し、サスキアを助けて命を落とした。よって今の平和は、彼なくしては成し遂げられなかったのだと。

ただ、サスキアがどれだけ声高に訴えようとも、彼が世界を救った英雄の一人として数えられることはなかった。デイズ・リーリングが歩んできた道筋は、あまりに血なまぐさいものだったから。戦犯の汚名を着せられたまま葬り去られたはずの彼が、なぜ今頃になって表舞台に現れたのか……それも、衆目に晒される救世主サスキアの娘の婚約者として。

「事情はわからん、手紙には必要最低限のことしか書かれていなかったから……本人に直接聞けるということだろう。不親切にも程があるが、今は二人を保護することが第一だ」

「ええ、フォーサイス様……しかし、どうしてお二人を本邸に招かれないのですか？」

オルガウム王妃じきじきの依頼なのだから、本来そうするべきだ。けれど、フォーサイスは彼らを迎えに行ったその足で、思ってもみない場所に連れて行くと言うのだ……そこはブルーデンスにとって、非常に因縁深い場所だった。

「国王陛下から承認を受けるまで、二人がアイリスにすることは隠さなければならぬ。それに、サスキアはディゾ……いや、リイン殿にオルガイム王女を娶るに相応しい身分を用意してほしいと依頼してきた。それを聞いて、俺にはトゥリース伯爵家しか思い浮かばなかった」

「まさかっ……！」

ブルーデンスは悲鳴のような声を上げかけ、慌てて口を噤んだ。

ディゾ・リーリングをトゥリース伯爵家の後継者につ……？

確かに伯爵家には現在、跡継ぎがない。現当主であるメイスは近衛師団長を辞して早二年、一人娘であるゴーシャの喪が明けた昨年からは、後継者探しを始めていた。メイスの大叔父に当たる先代に見込まれ、彼が継いだトゥリース伯は、代々血縁者が継いでいる。今回も一族内の嫡男ではない男子を養子にしようと、親戚筋を当たっていたらしい。

「叔父上の眼鏡に適う人間が見つからず、頭を悩ませていらしただろうか？ 相応しい人間がいなければ、当代限りで廃爵し、領地すべてをダグリード侯爵領へ統併合するとおっしゃっていたが……それではあまりにも後味が悪い」

彼の言葉を聞き、ブルーデンスの気持ちが沈む。メイスの一人娘だったゴーシャは殺された……そうするように誘導されたとは言え、直接手を下したのは自分だ。弟のバーネスが仕組んだ謀略の中でも、もつとも陰惨な結末を迎えた悲劇だった。一人の少女を意図的に悪の道へと誘導し、最終的には魂まで消滅させてしまったのだから。

ブルーデンスが俯き、押し黙ったことに気付いたフォーサイスは、すぐさま馬首を寄せ、彼女の

顔を覗き込んだ。

「ブルーデンス、もう過去に囚われないと誓っただろう……そんな顔をするな。叔父上も乗り越えようとしている。大事な今は今だ」

いつも彼は漆黒の双眸をまっすぐに向け、力強い言葉でブルーデンスの心の迷いを払拭し、未来に目を向けさせてくれる。

「はい、フォーサイス様」

ブルーデンスは雑多な感情を吹っ切り、笑みを見せた。確かに、立ち止まっている場合ではない。今まで誘拐事件に殺人未遂事件と、数々の憂き目に遭ってきたフォルセリーヌ王女……サスキアが目光らせていたからこそ今まで命を繋いでこれたのだろう。

たとえ王位継承権を放棄したとしても、救世主と英雄王の娘であるという事実は変わらないのだ。命を奪わずとも彼女を傀儡として祭り上げ、国を乗っ取るうと考える者がいるかもしれない。何より、捕縛された誘拐犯が放った刺客が、アイリスまで追ってこないとも限らない。

そして、彼女の夫となるディゾ・リーリング……今、まことしやかに語られている白き死神の伝説は、人々の欲と怨嗟を呼び起こすものだ。魔術師でも聖獣使いでもないただの人間が最高位の死神と契約するなど、前例のないことだった。しかも、その力を救世ではなく、復讐に使った。そのことが人々の反感を招き、今では前の戦争の元凶であるクラウディア皇帝に並ぶ、悪の代名詞となっている。

ブルーデンス自身も色素の薄い髪が彼と似ているため、「死神女」と揶揄されることがあった。

そのようにディゾ・リーリングを忌み嫌う者がいる反面、彼と同じく破壊神の力を得ようと、秘密裏に研究を進めている者もいる。ディゾ・リーリングが今も生きていたらと知れ渡れば、きつとそんな薄暗い思惑を持つ者達によって諍いさかいが起こるに違いない。

今ブルーデンス達がすべきことは、その無用な諍いさかいの回避だ。彼にダグリード一族の後ろ盾を与え、また不平分子達に狙われ続けてきた王女にアイリスでの安寧あねいな生活を提供すること……二年前にサスキアから受けた恩義に報いるために。

「サスキア様が信頼されている方ですから、きつと次期トゥリス伯爵に相応ふさわしい方に違いありません。一刻も早く国王陛下のご承認をいただき、紋章官の立ち合いの下、族譜ぶくの書き換えをしませんと」

「そのことについては、サスキアがすでに手を回している。我々が手紙を受け取ったと同時に、陛下もサスキアからの親書を読まれているはずだ。きつと今頃は、叙位式の手配をしてくださっているだろう……しかし、結局は目の前にいる俺よりも、サスキアか」

フォーサイスがため息交じりで付け加えた言葉を聞き、ブルーデンスはフードの下でしまったという表情を浮かべた。不用意にサスキアの名を口に出したのは迂闊うかつだった。今では愛情の裏返しだと理解しているが、フォーサイスはいつまで経っても彼女がサスキアを賛美さんびするのを嫌う。そして厄介なことに、それによる不機嫌は長引くのが常だった。

ブルーデンスは話題を変えようと、咄嗟とつさに口を開く。

「あつ、あの……リイン様のお姿は、当時のままなのでしょうか？ 髪と目の色は変えられるとは

言え、お顔立ちは変えられないはず。要らぬ憶測を呼ばなければいいのですが……」

「ん？ ああ……そうか、お前もクラウス・ディアであの方の肖像画を見たのか」

一瞬眉を蹙ひそめたフォーサイスだったが、すぐに合点がいったように頷いた。どうやら目論見もくろみは成功したらしいと知り、ブルーデンスは胸を撫で下ろす。

オルガイムの王城クラウス・ディアには、ディゾ・リーリングの肖像画が残されている。ブルーデンスはかつて雷襲隊副隊長ブルースとしてオルガイムに赴おもむいたとき、それを偶然目にしてた。

黒一色の背景に浮き上がる白い髪と、禍々まがまがしい赤色の隻眼せきがん……奇異な色彩を持ちながら恐ろしく整った顔は、左半分が仮面で隠されていた。まるで何かを封印するかのよう、その仮面は革ベルトで固定されていたのを記憶している。

さぞや名のある絵師の手によるものなのだろう。肖像画からは本人がまどついていたという鬼気さを感じられ、当時は戦慄せんりつしたと同時に釘付けになったものだ。

「特徴的な目と髪の色さえ変えてしまえば、気付かれることはないだろう。それよりも、今回のことがあの方にとって、不本意でなければよいのだが……」

彼が続けた言葉は、一度も会ったことがないはずのリインを慮おぼほる気持ちに溢れていた。そのことに、ブルーデンスは違和感を覚える。

フォーサイスが唯一ゆい、苦手意識を持つ人物がサスキアだ。ついさきほども、ブルーデンスが彼女の名を口にするだけで、機嫌を損そねかけた。だから、そのサスキアに手紙一つで国境近くの辺鄙へんびな村へ遣わされることになったことを、さぞや不満に思っているだろうと考えていたのだ。

「フォーサイス様……随分と楽しそうに見えますが？」

「そう見えるか？」

ブルーデンスが釈然としない思いで問いかけると、彼は愛馬の足を止めることなく、彼女に向き直った。正面から捉えた顔は、やはり不満そうには見えない。むしろ高揚しているようにさえ感じられる。

「……まあ、そうだな。楽しみではある。あの方は生ける伝説であり、俺が目標とする人物だ。興奮しないわけがない」

フォーサイスがもはや内に秘めていた想いを隠そうともせず、まるで少年のようなキラキラした笑顔を見せたので、ブルーデンスは目を見張った。彼がデイズ・リーリングに対して抱いている感情は、みずからがサスキアに抱いているのと同じ、憧憬だったのだ。

「不敗の救世主に、唯一土をつけた人物だ。騎士であれば、その腕に憧れない者はいまい」

フォーサイスの熱のこもった言葉に、なぜかブルーデンスは激しく狼狽した。鏡を見なくても、自分の頬が紅潮していることがわかる。

「ブルーデンス、どうかしたか？」

急に黙り込んだ自分にフォーサイスが怪訝な視線を向けてきたので、ブルーデンスはハッと我に返って頭を振る。

「……いえっ、何でもありません。急ぎましょう」

彼女は、己の感情と彼の視線を振り切るように、ソラーズの横腹を蹴った。

「おかしな奴だな」

フォーサイスはそう呟いたが、そこまで気にしていないようで、彼女に做って愛馬ハリユートの横腹を蹴った。ブルーデンスは追及されずに済んだことに、ひっそりと安堵する。

ただ、相変わらず胸の鼓動は落ち着かず、フードの下の頬は紅潮したままだった……さきほど己が抱いた想いの正体に、気付いてしまったからだ。

「……人のことは言えない」

彼女は並走するフォーサイスに聞かれないよう、小さな声で呟いた。

悲劇の英雄デイズ・リーリングに対し、夫が見せたかつてない執着……その原因に気付いた自分の中に芽生えた感情は、きつと嫉妬だ。

### 3

西の国境に接する都市イラクサにあるトカーズ村は、山々に囲まれたのどかな集落である。なかなか肥沃な土壌で、住民達は農業や花卉栽培を生業とし、自給自足の生活を送っていた。

そんな観光名所一つない辺境の村に、その日、来訪者があった。外からやって来るのは隣村や都市部から来る行商人くらいで、その顔ぶれも大体決まっている。だが此度の来訪者は、行商人でも



観光客でもなさそうだった。

王都でも滅多に見ないほど立派な葦毛色の軍馬、キャバルスに相乗りする旅装束の男女……一人はまだあどけなさの残る少女で、衣装の装飾や組み紐で編み込まれた銀髪を見るに、オルガイム人であるらしい。ただ、円らな瞳は漆黒なので、アイリスの血も流れているようだ。

そんな彼女を腕に抱き、馬を駆る青年。彼は目と髪の色から生粋のアイリス人と知れたが、容姿は並外れて整っている。ぴつたりと身を寄せ合い、時折微笑みを交わす二人は、親密な関係にあることが窺い知れた。

そんな二人が人で賑わう市場の前を進めば、普通なら注目的となるはずだ……それなのに、彼らのことを気に留める者は誰一人としていなかった。

二人が通った後には、キラキラと輝く光の粒でできた靄のらしきものがたなびいている。それはまるで、朝日に照らし出された朝靄のようだった。不思議なことに、その靄状の光は、村人一人ひとりの額に吸い込まれて消える。

それは「時忘れの術」を進化させた、「時騙しの術」だった。一級魔術師の中でも、一握りの者にしか使えない。術にかかった人々は、術者の意のままに記憶を書き換えられてしまう……村人達が二人に一切注意を払わないのは、そのためだった。

「……なんだか空気になった気分だったわ、リイン」

喧騒から抜け出し、黒い鉱石が敷き詰められた村道に出ると、少女が長い息を吐き出し、そう零した。ひどい緊張から解放されて安心したのか、トンと青年の胸に後頭部を預ける。

「気が散るから喋るなどは言ったが、息まで止める必要はなかったんだぞ、フォルセリーヌ」  
市場ではずっと息を殺して人形のごとく固まっていた彼女に、リインと呼ばれた青年は苦笑しながら言った。

「まあっ、何で言ってくれなかったのよ！ 最後は本当に苦しかったの……」  
フォルセリーヌと呼ばれた少女は、からかうような彼の言葉に不満の声を上げる。

「頬を赤らめ、健気に耐える姿が可愛らしかったからな」  
リインがそう言うと、フォルセリーヌは目を丸くし、ふたたび頬を赤らめた。

「……貴方のそういうところ、卑怯よ」

「褒め言葉と受け取っておこう」

火照る頬を両手で包み、憎まれ口をきく彼女を見て、リインは一層楽しげな笑みを浮かべる。彼がかつてクラウディア皇帝とともに人々から恐れられた白き死神、ディゾ・リーリングと同一人物だと見抜ける者はいないだろう。リイン本人が、みずからの変化に他の誰よりも驚いているのだから。

戦乱が終わり、生きる目的を見失っていた彼に、生きる喜びと人を愛する気持ちを思い出させてくれたのは、腕の中にいる少女フォルセリーヌ……偶然出逢った彼女はかつての戦友で、想い人もあったサスキアの一人娘だった。

ただ、彼女がサスキアの娘であることは、リインにとって何の価値もない。むしろ、一筋縄ではいかぬ厄介な義母ができると思うと、気が重い。できれば回避したい事態だが、それで諦められる

ほどフォルセリーヌへの想いは軽くなかった。

村道から外れ、舗装されていない野道を進んでいたリインは、やがて馬の足を止めた。

「いい加減、機嫌を直せ……着いたぞ」

そこはトカーズ村をまるで両腕に抱くように取り囲む山の麓だった。

リインは軽やかな身のこなしで馬から下り、馬上のフォルセリーヌに手を差し伸べる。

「……フォルセリーヌ？」

反応がないので訝しげに見やると、彼女は心ここにあらずといった様子だった。丁度山道の入口付近に立つ、こぢんまりとした白レンガ造りの家に、釘付けになっている。蔓草が伝う緑のアーチの先には小さな庭園があり、色とりどりの花々が所狭しと咲き誇っている。

いかにもお伽噺に出てきそうなその光景に、フォルセリーヌはすっかり魅せられていた。

そんな彼女を見て、リインは表情を緩める。

「気に入ったか？」

「ええ、とつても！ 可愛いお家だわ！」

ついさきほどまで不機嫌だったフォルセリーヌは、一転して彼に輝くような笑顔を見せ、無邪気に歓声を上げた。

「それはよかった。二、三日ここに滞在するからな」

「素敵！ リイン、貴方っ……本当に最高よ！」

リインが笑いを含んだ声で応えて腕を広げると、彼女は馬上から飛び下りながら抱きついた。そ

して愛する彼の抱擁を存分に堪能した後、蔓草のアーチの中へと駆けていく。素直で直情的なその姿を見て口元を綻ばせるリインの傍らで、ここまで二人を運んできたキャバルスが低く嘶いた。

「疲れたか、ヘルガ？ この四日間、ほぼ休みなただったからな……今、水を持ってきてやろう」

不満げな嘶きを聞いたリインは、労をねぎらいその首を搔いてやった。

兎のように庭先を跳ね回るフォルセリーヌを視界の隅で捉えたまま、手綱をアーチに結びつけていると、ふたたびヘルガが嘶いた。今度は興奮を孕んだ甲高い鳴き声だったので、リインは鋭い表情で視線を上げた。何かを探るように馬首を巡らすヘルガ。その視線を追うリインの漆黒の双眸に、徐々に剣呑な光が宿る。

「リイン？ どうかした？」

「家の中に入っている、フォルセリーヌ」

異変に気付いて駆け寄ろうとしたフォルセリーヌに、リインは短く告げた。その手を腰に帯びた剣にかけ、さきほど自分達がやって来た方向を注視する。

程なくして、舗装の途切れた村道の先にかすかに土煙が立つのが見え、次いでヘルガと同様に興奮した馬の嘶きが聞こえた。

「リイン、もしかして、ヘスター達じゃっ……！」

「いや、それはない……奴らは城の地下牢にいる。あそこからサスキアの目を盗んで逃げ出すなど、私でも不可能だ」

ハツとして声を上げた彼女の言葉を、リインは即座に否定した。だが表情を険しくしたまま、低

く抑えた声で再度促す。

「フォルセリーヌ、とにかく家の中に」

この村一帯には、時騙しの術がかげられている。村に一步でも足を踏み入れれば、その時点で術にかかり、自分達の存在を認識できなくなる。加えてこの場所に近づくことを、無意識に回避するはずだ。

冥界へと去った最高位の死神、イシュトレイグの置き土産であるその術が効かない相手とは、一体何者なのか？

「でも、リインっ……」

「待てっ、こちら！ ……ハリユートっ！」

フォルセリーヌの言葉を、二頭の馬の嘶きと、追跡者の焦ったような声が遮った。猛烈な勢いで迫りくる馬上の主達の姿がおぼろげに見え、リインはわずかに目を見開く。

追跡者は二人。そして、その装いは……

「……アイリス騎士団か？」

リインがそう漏らすと同時に、ヘルガが一際高く嘶いたので、彼は驚いて手綱を握る力を緩めてしまった。

「えっ、ちよつと！ ヘルガっ……？」

フォルセリーヌの制止を振り切り、ヘルガは追跡者達のもとへ一直線に駆けていく。

「落ち着けっ、ハリユート……、なっ……」

必死に手綱を引き絞って馬を落ち着かせようとしていた追跡者の一人が、ヘルガの出現に驚きの声を上げた。

だが直後、目の前の光景を見て首を傾げる。

「……どうのことだ？」

リインも追跡者と同じ心境だった。呆気にとられる二組の前で、二頭の馬が互いの首をすり寄せ、甘噛みし合っているのだ。

ヘルガが主人であるリイン達そっちの目で睦み合っているのは、黒鹿毛で額に流星のような白斑を持つキャバルスだった。

そのキャバルスの背から、追跡者の男が飛び下りる。すると弾みで、目深に被っていたフードが脱げた。精悍で整った男の容姿に、リインは妙な既視感を覚える。その意志の強そうな漆黒の双眸は、性別も背格好も違うのに、なぜかオルガウム王妃を思い出させた。

また驚くべきことに、時騙しの術だけでなく、自分の術は彼らには一切効かないようだった。実はリインは追跡者達の正体を探るため、さきほどから相手の心を透かし見る「心透術」を使っているのだが、彼らの思考が何一つ読み取れないのだ。

「大丈夫ですか、フォーサイス様？」

「ああ、俺は大丈夫だが、ハリユートがな……」

もう一人の追跡者も下馬し、二頭の馬を引き離そうとするパートナーに呼びかけた。そちらはまだフードを被っているために、容姿はわからない。ただ、身のこなしには一切の無駄がなかった。連れている馬はやはりキャバルス種で、葦毛のヘルガ以上に貴重な白馬だ。

彼らの会話から、二つの名が明らかになった。流星を意味する「ハリユート」は、黒鹿毛のキャバルスのものである。もう一方の名は、アイリス人ならば誰もが知る人物のものである。徐々に状況が把握できてくるにつれ、ラインの表情はさらに険しくなる。

「この葦毛、あの子のサスキアの馬か……！」

追跡者の一人が忌々しげにそう吐き捨てたことで、ラインの推論は決定的なものとなった。エリアスルート広しといえども、オルガイム王妃を呼び捨てにできる人間は限られている。

「それにしても早い……さすがと言おうか」

ラインが無意識に呟いた台詞は、かつての戦友にして未来の義母であるサスキアへの感嘆、そして不満に満ちていた。

「ライン、ヘルガが……一体、どういうことなの？」

「……フォルセリーヌ」

呪わしいほど鮮やかに思い出されたサスキアの面影を消し去ったのは、ラインがようやく手に入れた最愛の少女だった。剣にかけたままだった彼の手に縋り、顔を見上げてくるフォルセリーヌの円らかな瞳を見て、ささくれ立ったラインの心が落ち着いてくる。

「大丈夫だ、彼らは王都からの迎えのようだ」

ただ、迎えが来るのはもう少し先のことだと思っていたが……後に続けようとしたその台詞は口に出さずに呑み込み、ラインは不安げに瞳を震わせるフォルセリーヌの頭を撫でた。

そして、視線を前方に戻す。まるで長く引き離されていた恋人同士のように、キャバルス達はいまだ睦み合っている。そんな二頭の横で、大人しく佇む白馬の手綱を握る騎士と、目が合った。

フードが作る暗い影の中に浮かび上がった目の色に、ラインは驚かされる。その双眸は、銀色に煌めいていたのだ。

「オルガイムの女は、あまねく男装しなければならないという法律でもあるのか？」

「えっ……？」

ラインが投げかけた問いに、白馬の騎士はビクリと肩を震わせた。咄嗟に出してしまったらしい声は、高く……無意識に入っていたラインの肩の力が抜ける。二人目の訪問者の素性が、わかったからだ。

「……っ、無理だな」

二頭のキャバルスを引き離すことを諦めたのだろう、騎士がそう呟いて手綱を放し、ラインに向かつてまっすぐに歩いてくる。もう一人の騎士も、目深に被ったフードを脱いで彼の後に続いた。黒髪と銀の瞳を持つその騎士は、驚くほど整った容姿をしている。

「お見苦しい姿を晒し、申し訳ありませんでした。私はアイリス国軍の元帥、フォーサイス・ダグリード。そしてこちらは、我が妻ブルーデンスです……翔国オルガイムのフォルセリーヌ王女とその婚約者、ライン殿ですね。オルガイム王妃殿下から書簡を受け取り、お迎えにあがりました」

「さすがはアイリスの元帥閣下だな。サスキアの手紙を受け取ったのは、早くても一昨日だろうに……これほど早く夫人を伴い、こんな片田舎まで来るとは恐れ入った」

目の前で立ち止まり、左胸の前で右拳を握り込む騎士の礼をした二人に、リインは頷いて応えた。自分達を送り出したときの、サスキアの含みのある笑顔を思い出す。彼の戦乱から二十年の歳月を経た彼女は、以前にも増して、嫌味なほどに用意周到だ。

「まあっ……貴女、女性だったの？」

「お初にお目に掛かります、フォルセリーヌ様。目立つわけにはいかなかったものですから、このように紛らわしい格好で申し訳ございません。魔導石や魔法で姿を変えられればよかったです、生憎魔法が効き辛い体質ですの」

驚くフォルセリーヌに、ブルーデンスが至極申し訳なさそうに告げた。その言葉で、リインが抱いた疑問の一つが解決する。

「なるほど、ビガンナーか……それは時騙しも心透術も効かないはずだな」

長きにわたり魔法の力に曝され続けた人間は、魔法の効き辛い体質になる。そうした人々はビガンナーと呼ばれており、ブルーデンスもその一人だった。

「そして、私はヴィノーラです。手紙を受け取ったのが昨日だったものですから、呪医を雇って転送陣を作らせる暇もありませんでした」

フォーサイスがそう言った。彼は生まれつき魔法の効かない特異体質、ヴィノーラであるらしい。「なるほど、これだけうつつつけの伝達者もない。とりあえず、話は馬達を落ち着かせてか

らだ」

リインは、そう言つて顎をしゃくつた。

4

「すぐ戻るから、その辺で寛いでいてくれ。ここは片田舎の花売りの家だ。使用人もいなければ、貴族を客人として招くように作られてもいない。粗末なもてなししかできないが、生活水準が違うだけであつて、他意はないということとは理解してくれ」

ブルーデンス達を家に招き入れたリインは、そう言つて奥の間へ消えた。奥の間と言つても、家屋の外観から察するに、ブルーデンスの自室のワードローブよりも狭いだろう。通された客間兼居間のようなこの部屋を含め、部屋数もせいぜい四つか五つだと思われる。それでも、長身のリインに合わせて建てられたためか、天井は高かった。

室内を見回しながら、ブルーデンスは外套を脱ぎ、黒髪のカツラを取る。すると、フォルセリーヌが傍らにやつて来た。

「まあ……噂には聞いていたけれど、貴女、お父様と同じで本当に銀の目と髪をしているのね」

初対面にもかかわらず、屈託のない笑みを向けてくれる彼女は、小柄で華奢な体つきをしている。

明るい銀髪をはじめ、容姿には父であるオルガウム王の血が濃く表れているが、黒い瞳とその笑顔は、母親であるサスキアの面影を偲ばせた。

服装はオルガウム製の旅装束らしく、上着の留め具は組み紐でできている。たくさんの細い三つ編みを組み紐で一つに束ねた髪型も、オルガウムでは一般的なものだ。膝丈の巻きスカートの下には、足首まで隠れるやや厚めのタイツのようなものを履いていた。

何も言わずに送り出したサスキアもそうだが、ここまでの道中、リインは彼女を着替えさせようと思わなかったのだろうか？ きつと魔法で隠していたのだろうか、脚の形がはつきりとわかるその格好を見ると、同性のブルーデンスでさえ目のやり場に困る。

「ええ、フォルセリーヌ様。アイリスで宮廷医をしている叔父も同じ銀髪ですから、きつと母方であるシェルハラント公爵家の血統が強いのでしょうか」

ほっそりしたフォルセリーヌの脚から目を逸らしながら、ブルーデンスはそう返した。

「貴女の叔父様って、シエブローでしょ！ まだお会いしたことはないけれど、お母様から色々聞いてるわ」

サスキアからどんな話を聞かされているのか知らないが、フォルセリーヌの表情がパツと明るくなった。

二年前の事件をきっかけに、聖獣使いシエブロー・シェルハラントとしての身分を取り戻した叔父は今、宮廷医兼聖獣使いとして忙しい毎日を送っている。彼は二年前に出会ってからというものの、サスキアとは身分を越えた友人関係を築いたらしい。仕事の合間を縫って連絡を取り合っている二

人のことを、ブルーデンスはずっと羨ましく思っていた。

そのことを思い出した彼女は、フォルセリーヌの肩越しにフォーサイスを盗み見る。彼がシエブローを毛嫌いしているため、ブルーデンスは叔父と頻繁に会うことができないのだ。伴侶への愛情と肉親への愛情は比べられるものではないのに、なぜそこまでこだわるのか……そう思っただけで呆れていたのだが、今はその気持ちが少しわかる。

数刻前、フォーサイスが見せた少年のような笑顔……彼がブルーデンス以外の人間に、あれほど強い興味を示したのは初めてだ。そして、あのとき芽生えたリインに対する嫉妬は、いまだブルーデンスの胸につかえたままだった。

「大丈夫、ブルーデンス？ 貴女、顔が赤いわ」

フォルセリーヌの怪訝そうな声が耳朶を打ち、ブルーデンスはハツとして我に返った。王女と差し向かいで会話しているときに気を散らすなんて、あまりにも不敬な……今の自分は、本当にどうかしている。

「申し訳ありません、フォルセリーヌ様！ お話中……」

「あつ……いいの、いいの、気にしないで。きつと日差しのせいね。雷龍の背骨山脈を越えた途端にこの陽気で、私もびつくりしたわ。その格好はとても似合っているけど、軍服の上に外套やカラまで被っていたら、暑さでぼうっとしてしまって当然よ」

ブルーデンスが慌てて謝罪すると、フォルセリーヌは首を横に振り、逆に気遣ってくれた。その声は、二人だけの会話にしてはやや大きい。

王女はブルーデンスの視線を辿って、彼女がフォーサイスに関する事で悩んでいると悟ったのだらう。だから、それを彼に知られずに済むよう誤魔化してくれたのだ。

さらにフォルセリーヌは、別の話題を振ってくれる。

「それよりもブルーデンス。貴女のこと、これからお義姉様と呼んでいい？ 私一人っ子だし、年の近い従姉妹とかもいなかったから、ずっとそういうのに憧れていたの」

「ええ、とても光栄です。フォルセリーヌ様」

「駄目よ、お義姉様だったら。それじゃ全然お義姉様らしくないわ。私のことは呼び捨てにしてちょうだい」

「わかりました、フォルセリーヌ」

ブルーデンスはそう言うて微笑みながら、王女への認識を改める。婚約者リインと一緒にとは言え、まだ十八歳になったばかりである少女……祖国を離れ、異国の地で心細い思いをしているのではないかと、ブルーデンスは案じていた。

また、いくらオルガイム人の身体能力が高いとは言え、何不自由なく育った大国の王女が丸四日もの間、馬上で揺られ続けたのだから、さぞ疲れたことだらう。それに、彼女が暮らしていたオルガイムの王城と、アイリスのトカーズ村では、文化も気候も違う。市井の人々の生活を目にしたのも、初めてであるに違いないのだ。

それでも疲れや戸惑いを一切見せないどころか、自分達を快く受け入れ、気遣いさえしてくれる彼女は、ブルーデンスが想像していたよりずっと強い人間であるようだ。さらに、物怖じしない性

格や快活な言動は、どこか義妹のファティマを彷彿とさせ、親近感を覚える。

「これはゴアヤックか……見事な切断面だな」

ブルーデンス達の背後から、感嘆の念がこもった呟きが聞こえてきた。二人が振り返ると、それまで黙って部屋を観察していたフォーサイスが、中央に置かれたテーブルに手を這わせている。手作りらしいその木製テーブルにはテーブルクロスが敷かれ、薄紅色の花を活けた陶器の花瓶が置かれていた。

ゴアヤックは、天に届くかというほどに生長する巨木で、重くて非常に硬い木質で知られる。城や神殿の基礎、また、水に強いことから船材にも使われている。決して、片田舎の花屋が食卓にするような代物ではない。

「えっ……本当にゴアヤックですか、フォーサイス様？」

ブルーデンスは瞠目し、信じられない思いでテーブルに近寄る。

「ゴアヤックって、あのゴアヤックっ？」

フォルセリーヌも、驚きの声を上げて彼女に続いた。

「これは……間違いありませんね、虎斑がありますから」

ブルーデンスがテーブルクロスの端をめくると、ゴアヤックの特徴である、まだらな横縞の木目が現れる。

「ただの斧で切れる木ではないのに……」

歪みのない矩形に切り出された天板の表面は手触りが滑らかで、四隅も安全な丸角に加工されて

いた。村を取り囲む山にゴアヤックが生えていてもおかしくないが、加工には鋳物用の特殊な切削工具を必要とする。ここに、そこまで高価な切削工具があるとは思えなかった。

テーブルを見下ろす三人の頭に浮かんだのは、エリアスルートに二つとない伝説の刃。

「死神の剣か」

「白き死神の刃でしょうね」

「イシュトレイグだわ」

同時に呟いた名称は三者三様だったが、それらが示すものはぴたりと一致していた。

「……何の話だ？」

そのとき、まるで見計らったかのように、かつてその死神の剣の主であった人物が戻る。皆が声のした方を見ると、奥の部屋の入口にリインが立っていた。

彼は、深い藍色に染められたリネンのシャツに、黒の革ズボンという格好に着替えていた。煌びやかな貴族の衣装とは比べられないが、清潔感があり、服など結局は身につける人次第でどうにもなるということを、三人は思い知らされる。

そのリインは、四つのグラスと水差しが載ったトレイを手にはしていた。

「お手伝い致しますっ……」

ブルーデンスは慌てて動いた。手にしていたカツラと外套を椅子の上に置き、トレイを受け取るうと、リインに歩み寄って手を差し出す。

「……そう構えるな、毒なぞ入れていない」

リインは苦笑を浮かべて彼女の手を避け、トレイをテーブルの上に置いた。

「いえっ、断じてそのようなことを考えていたのではありません。侍女の経験があるので、給仕には慣れているのです」

ブルーデンスは頭を振り、重ねてそう訴えた。

「オルガイムの王族の血を引く人間がなぜ侍女など……？」

リインが怪訝そうに問うと、フォーサイスが口を開く。

「ブルーデンスは一時期、行儀見習いのために叔父の館で侍女をしていて、私とはそこで出逢ったのです」

「まあっ、何て運命的な出逢いなのかしら！」

そう声を弾ませたのは、フォルセリーヌだった。年頃の乙女である彼女には、二人の馴れ初めが、夢物語のように感じられたらしい。

「なるほど。元侍女で剣も使える侯爵夫人か……何とも多才な奥方だな」

「はい、お陰で目が離せません」

「私のことはそれぐらいでっ、あの……こちら、グラスにお注ぎすればよろしいのですね？ どうぞ、お掛けになってください」

様々な意味に取れるフォーサイスの言葉と、自分に集中する視線に羞恥心を覚えながら、ブルーデンスは水差しとグラスに手を伸ばす。

ガラス製の水差しの中には、よく冷えた琥珀色の液体が入っていた。テーブルについた皆の前に





グラスを置き、やや粘性のあるそれを注ぐ。

「いただきます……あ、美味しい」

最初に口をつけたフォルセリーヌが、嘆声を漏らした。差し向かいに座ったブルーデンスも、グラスを口に運ぶ。粘り気のある液体はゆっくりと舌の上を転がり、喉に滑り落ちていった。ほのかな甘みと清涼感があり、渴いた喉が潤い気分がすっきりした。

「ええ、本当に。この瑞々しい芳香は……」

「ラバンデュラ？」

ブルーデンスが呟くと、先に思い当たったらしいフォーサイスがそう言った。

「鼻が利くな。ラバンデュラを蜜源とした蜂蜜酒だ。だが酒精は飛ばしてあるから、子供でも飲める」

「あらっ、子供って私のこと？」

ラインが三人の反応を見て満足げに言うと、隣に座るフォルセリーヌがムツとして声を上げた。

「酒精を飛ばしたのは、許可なく酒を作れば罰せられるからだ。これから大事な話し合いをするというのに、酔っぱらうわけにもいかんしな……大体、お前は歳を気にし過ぎだ」

「ちよっとっ、言ってる傍からまた子供扱い！」

ラインが苦笑しながら頭を撫でたことが、彼女の怒りをさらに煽ってしまったようだ。

「お前の髪の手触りが好きなんだ。いいだろう？ 減るものでもあるまいし」

そう言ってフォルセリーヌの細い三つ編みを二房救い上げ、自然な造作で口付けたラインを見て、

フォルセリーヌはもちろんブルーデンスまで顔を赤くする。

「……っ！ リイン、人前っ……」

リインが浮かべた穏やかな笑みを見て、ブルーデンスは今さらながら己の偏見に気付いた。目の前の彼は、ブルーデンスがそれまで抱いていた人物像をことごとく覆っていく。銀の髪を優しく梳く指先も、気遣う眼差しも、フォルセリーヌへの愛情に満ち溢れていた。どこか半信半疑だった彼らの婚約が現実のものであると、ブルーデンスはようやく実感する。

だが慌てふためくフォルセリーヌが気の毒で、二人から視線を逸らした彼女の目に、白レンガが剥き出しの内壁が映る。壁紙こそ貼られていないものの、凹凸の多い壁面には汚れも蜘蛛の巣も見当たらない。そこでブルーデンスは、さきほど話題になったゴアヤック製のテーブルと、揃いの椅子に目を走らせた。

決して高価なものではないが、天板には染み一つないテールクロスが敷かれている。皆が腰かけている椅子の座席部分にも、薄いクッションが置かれていた。もちろん、グラスや水差しにも汚れはなく、蜂蜜酒もよく冷えている。木造の床にさえ、わずかな埃も溜まっていなかった。

極めつけは、空気だ。壁には乾燥させた花と香草で編んだリースが飾られ、テーブル中央の花瓶にも生花が活けられているが、二つの香りがぶつかることはなく、むしろ相乗効果で瑞々しい香りが室内に満ちていた。至るところに工夫が施され、清潔な環境が保たれているのがわかる。

かつて身を寄せていたトゥリース伯爵邸の地下にある、使用人達の居住空間よりもよほど温かみがあり、居心地が良い……だからこそ、おかしい。

「……ブルーデンス、お前も気付いたか？」

辺りを見回しながら、かすかに眉根を寄せた彼女に、傍らのフォーサイスがそう尋ねてきた。どうやら彼も、ブルーデンスと同じ疑問を抱いたらしい。

「どうかしたか？」

顔を見合わせる二人に、リインが訝しげに問いかけてきた。

「はい、あの……一つお尋ねしたいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」

ブルーデンスはリインに向き直って、そう問い返した。

「答えられることならな」

「リイン様は、最近までオルガイムにいらしたのでしょうか？ それなのになぜ、しばらく空けていたはずの家が、ここまで快適に整えられているのでしょうか？」

多少の含みを持たせながらも頷いた彼に、ブルーデンスはみずからの疑問をぶつける。部屋のことでだけでなく、彼が着替えてきた服にしても、長く袖を通していなかったようにも見えない。「ああ、そのことか。一年前にアイリスを発つとき、店と家の維持管理を知人に頼んであったんだ。ここまでしてくれるとは思わなかったが、小さな村だ。村人達は皆、親戚のようなもので、見返りなく世話をしてくれる。旅立つ前にも心配され、散々引き留められたしな……少々節介が過ぎるが、有り難い話だ」

「心配？ どうして？」

リインの最後の台詞を聞いて、ブルーデンスより前に声を上げたのは、フォルセリーヌだった。